

## 国産大径木を使ったスケルトンドミノの家 日本伝統の軸組み構法を現代化

日本ならではの木の家を、日本の木でつくることを、現代においても一度実現しようとする、「スケルトンドミノ」という構法がある。「グリーン・パワー」の今年2月号のBOOK欄で、事例を重ねてこの構法を確立した建築家、故黒川哲郎氏の著書『日本の木でつくる スケルトンドミノの家』（平凡社）を取り上げた縁で、10月に東京都世田谷区で開催された住宅見学会に参加した。

この本によると、スケルトンドミノとは「日本の気候風土や生活文化に合った家を、民家の太い柱と梁を結び『差し鴨居』の仕口を現代化して、戦後に植林され大径木に成長して使い頃となった杉を使う構法」である。家のスケルトン（骨格）は、外壁や屋根、あるいは内装や家具、設備などから独立しており、家族の成長や



自然光が差し込む吹き抜け

合いも程よく変化して、木に囲まれた心地よい空間が広がっていた。  
家を支える8本の柱は、どれも24センチ角。一般的な在来構法では12センチ角の細

世代の交代に合わせて室内の空間演出を変更しやすいという利点も備えている。

### 木の柱と壁の空間

訪ねたのは、閑静な住宅街にある2階建て（ロフト付き）で、外壁を焼き杉の板で覆った家だった。敷地面積約100平方メートルで、延べ床面積もほぼ同じだという。

中に入って目を引いたのは、無垢の太い柱と、リビングでも和室でも風呂でも見られた木の壁だ。柱はスギ、壁に使われた合板はカラマツであり、全て国産材が使われている。建築後すでに4年ほど経過しているそうだが、色

い柱が多量に用いられ、柱が壁の中に隠れていて、見えないことが多い。だが、ここで目の前に見える柱は古民家の大黒柱を思わせるように太くて長く、気分的にも落ち着きを与えてくれるように感じた。梁は同じ24センチ角の材を上下に重ねてあり、柱とは金物でしっかりと接合してある。がっしりとした軸組みがつくり出す広い空間を生かして、リビングの一部は吹き抜けとなっており、窓からの自然光が差し込んでいた。

ノの家を、無垢の大断面製材で建てる環境は整いつつあるわけだ。ただし、設計担当者からは「材の調達には、まだ時間と手間がかかる。五つの地域に問い合わせ、金額と納期が折り合ったのは1カ所だけ。工務店もその製材所と付き合っていると頼んだ」と、柱や梁に使う太い材を得るのに、まだ困難が伴う実態も報告された。

### 材の調達や計算法が課題

戦後に植林されたスギなどが大きく育ってきて、以前に比べると、ここで柱や梁に使われたような比較的大径材も手に入りやすくなっている。日本の木でつくることを目指したスケルトンドミノ



スケルトンドミノの仕口

製材化された木を構造材として扱う方向が進んでいるようだが、木造の特性を生かすためには、丸太にしろ製材にしる大断面の無垢で使うことが大切。日本の森林を資源として活用するためにこの構法を開発した（夫だった）黒川の思いを継承し、日本の林業を再生する木造建築の新しい展開につなげていってほしい」と考えている。

## 子どもたちへ

### ふしぎだらけの海底地形 調査技術も含めて紹介

書名にある「日本列島、水をとったら？」を見て、そのテーマに関心が湧いた。本を開くと、まず観音開きのページに日本の周りの海の水を取り除いた、初めて見る海底が現れた。そこには溝や山、盆地などがある。その海には富士山よりも高い山があり、世界一高いエベレスト山がすっぽりと沈んでしまうほど深い海溝もある。そして、地球を覆うプレートの動きがどんな地形をつくるのか？ 深い海溝はどうしてできるのか？ たくさんの火山が集ま

っている場所はどんな所なのか？ 日本に地震が多いのはなぜか？ 津波はどうして起こるのか？ などについて、分かりやすく書かれている。それにしても、これらの研究はいったいどうやってなされたのか？ 海は地球の表面積の約7割を占める。海の水を実際に取り除けるわけでもないのに、海底の調査ができるのはなぜかという思いが深まる。最後に、その疑問に答えるかのように、海を調べる技術も紹介されている。（市）



日本列島、水をとったら？  
ビジュアル地形案内1  
海の底にも山がある！～海底地形  
加藤茂 伊藤等 監修  
徳間書店 本体1800円+税

## おとなの人に

### 観察者を悩ます小さな哺乳類 頭骨や歯列の写真も収録

身近な森や草原にいることは知っていても、小さかったり地中にいたりして、なかなか見ることはできない。しかも意外と種類が多い。そんな悩ましい哺乳類たちを、写真家と研究者のペアで、体の形態や生活環境を詳しく説明した二つの写真図鑑が続げざまに発行された。頭骨と歯列が分類の基礎になるため、その写真が収められているのは他の図鑑にない特色だろう。収録種数は、それぞれ31種と21種。多くの人にとって、日本のリス・ネズミやモ

グラに、こんなに種類があること自体が驚きのはず。広範囲に分布するアカネズミやアズマモグラに至っては、地域的な差についても解説してある。一方で、タイワンリスやヌートリア、アムールハリネズミといった外来種もきちんと収録されている。観察したければ、夜行性の種類が多いので、当然ながら出かける時間帯を選ぶことが重要だという。あとは気持ちと工夫の勝負だ。きっとネズミやモグラは、私たち観察者の執念を試しているに違いない。（湖）



リス・ネズミ ハンドブック  
モグラ ハンドブック  
飯島正広 土屋公幸 著  
文一総合出版 とともに本体1300円+税